

会 議 録

- 1 会 議 名 第4回北九州市新ビジョン検討会議
- 2 会 議 種 別 市政運営上会合
- 3 開 催 日 時 令和5年11月28日(火) 9時00分～11時00分
- 4 開 催 場 所 リーガロイヤルホテル小倉 3階 クリスタル
(北九州市小倉北区浅野2-14-2)
- 5 出席者氏名 別添「出席者名簿」のとおり
- 6 会 議 概 要 (1) 配布の資料に基づき事務局より説明し、意見交換。
- 7 会 議 経 過 (発 言 内 容)

議題1～新たなビジョンの素案について～

【基本構想素案について】

≪津田 純嗣 構成員≫

- 全体的にまとまっていると思う。基本構想の目指す都市像のところで、『『一步先の価値観』を実現する』というのが何なのか、最後まで読んでも分からず、「～など」となっており自信のなさが見えてしまう。一步先の価値観とはこの3つだ、と最初にドンと出していった方が良いのではないか。最後まで説明を待って見ても、最後までほわっとしているように感じる。

≪松永 守央 構成員≫

- 一言で市民の人たちに浸透するキャッチフレーズが欠けている。アピール性が弱い。

≪松永 裕己 構成員≫

- (目指す都市像は) あまりお役所っぽくなくて良いと感じた。
- 「つながり」と「技術」は、例えば官民連携でつながる、他の都市とのメガリージョンを目指してつながるといった観点で見ると分かるが、「情熱」は急にここだけ「気合い」と「根性」みたいを感じる。(基本計画素案の)35ページに説明があるが、それが情熱なのかチャレンジ精神なのか柔軟性なのか、即「情熱」ということではないのではないか。この言葉が適切に表現できているのか、そこが少し気になった。

《永田 昌子 構成員》

- 目指す都市像が少しほんわかしているのは、良いことなのか。これだけ危機感がある中で、逆に、伝わらないのではないかと、「ヤバいぞ北九州」くらいの方が伝わるのではないかと。公害を克服したのも「ヤバい」と思ったからこそ頑張ったという底力だろうと勝手ながら解釈している。この目指す都市像だと、まだ余裕があると感じた。

《宮坂 春花 構成員》

- 永田構成員の「ヤバいぞ」というワードはとても良いと思った。マイナスに捉えられがちであるが、逆にプラスにも捉えられる。言葉の表現の受け取り方は人次第であるため、危機感としてもプラスとしても捉えられる言葉が良い。

他方、これは誰に対して発している都市像なのかが分かりにくい。そして最後に、「だれもが豊かで安らげる未来を作っていきます。」の1文だけ語尾が丁寧語になっているのがすごく気になる。他と同様にカッコよく、言い切った方が伝わるのではないかと。

《柳井 雅人 構成員》

- 全体の印象として、だいがまとまってきて良くなっている。ただ、目指す都市像と3つの重点戦略「稼げるまち」「彩りあるまち」「安らぐまち」について、3つの重点戦略の積み上げでこの目指す都市像につながっているのかがピンとこない。一個一個は良い表現なのだが、全体を俯瞰して見ると、つながっているように感じられない。マスタープランの骨格が伝わらないため、そこは微調整が要るのではないかと。折角の良い言葉なのでそこは検討して欲しい。特に「稼げるまち」と「彩りあるまち」は調和ではなく牽制し合う関係である。メリハリを付けて効率性や効果性といったものを追求し、選択と集中を行う際には影響を受けるため、相互関係をきちんと考えた方が良い。

《内田 晃 構成員》

- 基本構想素案の8ページのイメージ図であるが、前回指摘させていただいたこともあり、クリアになった。

一方で、歯車のサイズとして、安らぐまちが大きく良く目立つ。ここは行政主導でやるから目立つのか、何かしら意味があるのか。

《大庭 千賀子 副市長》

- 歯車の大きさは立体感を出すためにメリハリをつけた部分がある。どれが一番大事でどれが大事ではないということではないが、そうは言いつつも多くの市民の方が望むのは、やはりウェルビーイングが感じられるまちだろうと、住み続けるということでは安らぐまちが大事だろうという考えのもと。

「稼げる」、「彩りある」は行政計画としてはあまり使わない表現ということもあり、市民の方から不安になるといったご意見もあり、その点を踏まえて、こういうイメージ図にしている。

《内田 晃 構成員》

- ヒエラルキーがあるわけではないということで、理解した。

《寺山 大右 構成員》

- 稼げるまちというのが企業にとってどういう方向で「稼げるまち」になるのか、という方向感があると良い。北九州に来るメリットなど、そういったフレーズがあると良い。また、北九州市に住んでいる人にとって、リスキリングなどを通じて自分自身が稼げるようになると良いという意見もあるため、そういったところも方向感として入れた方が「稼げるまち」の意味がよりクリアになると考える。

《三谷 康範 構成員》

- 7ページ下段の「稼げるまち」の文章「年齢や性別、国籍に関わらず」のとおり、ある程度、外から入ってもらわないと人口の復活もあり得ないと考えるが、外の人に対する包容力といった視点を示さないと排他的な感じになってしまう。安全安心のキーワードについても、何かが起こった時には頼りになるということを示さなければ、地域外の方、特に外国人は北九州に来て、もし何かあった時にはどうしたらよいか分からなくなる。何かあった時に助けてくれないと、外から来た人はがっかりしてしまう。外に対する優しさ、そういった観点をしっかりと入れておいていただきたい。

《池尻 和佳子 構成員》

- 「安全なまち」のところに治安だけではなく、災害の少なさなども訴えたらと考える。
「一步先の価値観」は人によって捉え方が難しい。言葉としては素敵な響きであるが、正解が分からなくてモヤモヤしてしまうのではないか。そして最後の「愛さずにはいられない」は、非常にくすぐったい。現実的な文言で表現できた方が良いのではないか。

《壹岐尾 恵美 構成員》

- ステートメントのところで、言葉を生み出すプロに入ってもらいた方がよりブラッシュアップされるのではないか。この言葉があって、次に繋がっていくと思っているので検討してほしい。

【基本計画素案について】

〈第1章「計画の策定にあたって」〉

《松永 守央 構成員》

- 推進体制について、色んな事業はつながっているはずなのだが、バラバラに見える。言葉が足りない気がする。各部署が協力しながらやるのか、プロジェクトチームでやるのか、そういった柔軟性などの姿勢、そこを整理する必要がある。

- KPI の設定がされているが、投資に対する効果が検証できる仕組みでないといけない。検証することがすごく大事であり、数値で投資効果が測れるものは出さないといけない。計画に入れなくても良いが、最小の経費で最大の効果が得られるようにそこは意識をして欲しい。

《伊藤 直子 構成員》

- 20年先を見据え、5年ごとに検証する、ということだが、どのような組織をもって評価していくのかということを示すべきである。今のメンバーは行政も含め5年後にはいない可能性がある。誰が責任を持って検証をしていくのか、それが組織体制であるのかなど、是非、検討いただきたい。

《壹岐尾 恵美 構成員》

- 市政変革による基盤づくりはとても大切であり、絶対的にやるべき。行政の方は熱心で優秀な方が多いが、「市政変革による基盤づくり」部分で記載がある「各局室が自主的・自律的な」というフレーズに表れているように、部署ごとに動いている感じがする。横の繋がりを大切にするなど、その辺りを記載するかどうかは別にして考えて欲しい。

《津田 純嗣 構成員》

- 推進体制では、トランスフォーメーションという言葉がよく使われるが、横の繋がりが重要ということである。1つは、大きなデータベースを使って、違った部署であっても全員が同じデータを見て考えることができるということ。産業界でも企業間や異業種間の連携、横の繋がりが世の中を大きく変えようとする流れである。市においても横の繋がりの方法論をしっかり考えて、市が真ん中に立って横断的に全体をつなぐような役割を果たすという決意を示して欲しい。

《第2章～第4章「稼げるまち」「彩りあるまち」「安らぐまち」》

《寺山 大右 構成員》

- 第2章について、誰がこれを行うのか、主体が若干不明瞭である。行政と行政以外が混在しているように見受けられる。

例えば、「1 稼げる「基盤」をつくる」の「(3) 新たな産業用地などの創出」では、規制の見直しとあるので行政主体と考えられる一方で、「2 稼げる「人」を育む」の「(3) 性別に関わらないキャリア形成の支援」では、稼げるまちとして掲げることは重要だが、主体は誰なのか、企業であるならば、企業がこの計画に基づいて遂行するインセンティブがどこにあるか、といったところが見えづらい。

- 第3章以降は行政が主体であると比較的わかりやすく、このように宣言することで推進できるものと考えられる。

《柳井 雅人 構成員》

- 「稼げる「産業」をつくる」について、順番がこれで良いのかが気掛かりである。熟度が高いものと将来的な話のものが混在している。

その中でも気になるのは、「成長の芽となる「未来産業」の振興」の中にAIなど情報系産業が入っていないことや「(3)「(仮称)北九州グリーンインパクト」の推進」に新エネルギーが入っていないことである。特にAIなど情報系の産業集積については、項目を一本建てた方が良いのではないか。

- メガリージョンの推進において、北部九州に加えて大分、宮崎を含む「東九州軸」の連携も必要ではないか。

《内田 晃 構成員》

- 第2章から第4章まで全てに関わることとして、新型コロナウイルス感染症が5類に移行してから、外国人観光者も目立つようになったが、インバウンドの話があまり見えない。いくつか書いてはあるが、高度外国人人材も含めインバウンド対策が重要。

また市内に住む外国人が安心して暮らせるといった発想も必要ではないか。それを「安らぐまち」の中に入れることでより幅広く対応できるものとする。

《石田 真一 構成員》

- 内田構成員のご意見にも通じる場所であるが、労働力の確保や人口増加への寄与という観点で見ても外国人の受け入れは私も重要だと考える。包摂性にあふれる北九州市民の特性や、技能実習生の制度変更が見込まれる状況も踏まえ、第5章の人口増に向けた道筋においては、若年層のみならず外国人を含めても良いと考える。

- 第2章で「北九州グリーンインパクト」を記載していただいているが、第3章の彩りあるまちの実現「1 彩りある「空間」をつくる」の「(1) 都市の魅力を高める「まちなみ」づくり」のところで、「環境に配慮した」という表現が盛り込まれても良いと考える。

そのような空間づくりを進めることで、環境問題への意識が高い層への訴求が図れることに加え、都市のブランド価値向上・イメージアップに繋がると考える。

《松本 真理子 構成員》

- これまでの議論にあった「働き方改革」のところが見づらい。子供の幸福度を達成するためには、親の労働時間の短縮や柔軟化ということが大切になってくるため、子どもの幸せと親の働き方が繋がっているということを上手く表現していただきたい。

《永田 昌子 構成員》

- 子育てしていて、次男が小学生で、大きな不満はないが、小学校入学時に、色んな道具に膨大な名前を書く作業など、時に挫けそうになることもあった。親の負担を減らすという視点を教育の部分で考えて欲しい。

《津田 純嗣 構成員》

- 「稼げる「人」を育む」のところで、教育の部分では大学生に関する記述がほとんどであるが、チャレンジ精神、創造性、実行力を育むとなると、やはり小学生から始めないととても間に合わないと考える。KPIに「夢を持つ小中学生」とあるので、教育の方向性をぜひ打ち出していただきたい。

《松永 裕己 構成員》

- 津田構成員のご意見に関連する部分として、「(1) スタートアップの創出・成長」に「アントレプレナーシップ（起業家）教育を推進します」とあるが、アントレプレナーシップだと一般的には「起業家精神」と訳されるため、起業家教育なのか起業家精神の教育なのかは、実際はかなり異なってくる。起業家だけでなくそれを支える人材も支えないといけないため、起業家精神の方が適切だと考える。
- 「(4) 多様な人材が働くことができる環境の整備」というのは働けていない人が働けるようにする、ということと読める。それはそれで大事だが、最近のリスキリングは今働いている方がまた勉強しているんなものを身につけて新しい場所で輝く、そういうニュアンスも出していただきたい。

《永田 昌子 構成員》

- 健康経営を入れていただいているが、「多様な人材が働くことができる環境の整備」はそのうちのひとつではあるものの、従業員の健康に投資することで稼げる、生産性が高い企業を作るところが目的であるため、表現を工夫していただきたい。

《宮坂 春花 構成員》

- 外国人人材に一方的に日本語能力や技能技術を向上させるというのではなく、市民が外国人とコミュニケーションを取れるように、英語力やコミュニケーションのための手段や方法を身につけることが意識されるようにしていただきたい。

《平山 由夏 構成員》

- 「夢は何ですか」と聞かれる機会があったのだが、すぐに回答ができなかった経験がある。子どもが夢を持ってという話があったが、大人も年代別でどんな夢を持てるか、そういったところを指標入れるなど、そのような「粋」な部分があっても良いのではないかと考える。

《第5章・第6章 人口増に向けた道筋・主な成果指標》

《柳井 雅人 構成員》

- 成果指標をみると、男性の健康寿命の数値がかなり低い、健康寿命の延伸が人口の滞留には一番効果的であり、伸ばすための施策を具体的に組み込んでいく必要があると考える。

加えて、指標として取るのは難しいが交流人口を増やす仕掛けを考えることは重要なので、そのための指標についても考える必要がある。

《松永 守央 構成員》

- 第5章について、稼げるまちと安らぐまちの両方がないと人口が維持できないというのはその通りだが、おそらく皆全部は読まないと思われる。生活環境の潤いの部分、稼げるまちの経済の部分など、わかりやすくマップで書くことはできないか。そのような形で北九州のことが分かるような表現を考えてはどうか。そうすると市民の方々もこれまで気が付かなかったものに気付き、それが魅力になるかもしれない。文字をずっと読み込むのではなく、ビジュアル的にパッと見たら、伝えたいことが伝わるようなものが必要である。

《松本 真理子 構成員》

- 「一歩先の価値観」ということを示せる指標が必要ではないか。一歩先の価値観とは何かを明確にして、指標にする。子育て関係の分野の視点だとインクルージョンやダイバーシティであるため、その指標が1つあると良い。

《寺山 大右 構成員》

- 成果指標はすごく大事であり、この基本計画における発信相手が明確になる。「稼げる」の指標に市内の名目総生産などが挙げられているが、市民の立場に立つと一人当たりの付加価値額がどれだけ上がるかというものを入れた方が良いのではないかと考える。
一方で、企業側からしても北九州に来ることのメリットがわかるような指標を示せると良いと考える。
- 小倉と黒崎の商業地の地価を挙げているのは、おそらくは小倉と黒崎の賑わいを今以上に高められれば当然地価も上がるものという認識であるが、一目でこれを見た方に対しては意図が伝わりにくいと思われる。
- 「安全なまちと認識している市民の割合」なども大事だが、市外の人が見ても分かる客観的な成果指標などを入れた方が人を呼び込めると考える。

《事務局》

- 商業地の地価はまず地元消費が重要と考えていること。彩りあるまちということで、地元消費を上げることによる地元の商業地価を上げたい。加えて、不動産デベロッパー等のヒアリングでは、地価が上がらないと投資もしにくいという話があったことから、都心部などから投資を呼び込むということも踏まえてこの指標を掲げた。

《柳井 雅人 構成員》

- 目指す都市像と重点戦略、それを検証する指標は関連性があり、ストーリーが必要である。重点戦略のどの部分にあたるのか、その因果関係のように考えることで、抜けている指標も見

えてくる。

《津田 純嗣 構成員》

- 成果指標について、自身の出身である製造業で考えると、「人」「モノ」「金」で評価する。
「人」については、製造業という立場もあるが、理工系の人材がどれだけ輩出されているか、
「モノ」については、物流的な機能、仕事をする場所・土地、毎年どれだけの産業用地が準備されるか、特に場所の選択については非常に考慮する部分である。その部分を計画に盛り込み指標にして、実際にアウトプットすることで、企業にとっての魅力になると理解しているので、是非考慮していただきたい。
- 結局は何をするのかという「Do」がないと指標にはならないので、そこを踏まえて、お願いしたい。

《松永 裕己 構成員》

- 成果指標の表に重点戦略のどれにあたるのかについて、その見せ方を工夫した方が良い。
- 女性の就業率を25-44歳としているのは何か理由があるのか。

《大庭 千賀子 副市長》

- M字カーブの凹みの部分であり、改善はしてきたが、ここが維持されなければ、復帰しても非正規雇用につながったりと課題があるということで挙げさせていただいた。
なお、重点戦略との関係、見せ方については備考に掲載するなど、再度検討したい。

《内田 晃 構成員》

- 成果指標の部分で、将来の夢や目標をもっている子どもの割合が、小学生に比べ、中学生の値がずいぶん低い。次期教育プランとの整合性もあるが、一律にプラス何パーセントというものではない。
今後どのように設定するか注目したい。

《宮坂 春花 構成員》

- 第5章「人口増に向けた道筋」について、そもそもどこで人口を増やすのかという点だが、そもそも20代30代の人口が少ないため、そこを増やすのは難しいのではないかと。したがってインバウンドや出生率を上げるなど、他の方法で増やすことになると考えられるが、その中で市外に住んでいる人に来てもらうためのPRはまだ改善の余地がある。現在は「北九州市の過去のすごいところ（八幡製鉄、製造業など）」を押し出しているイメージ。そのような分かり切ったことを出すのではなく、「今の北九州がすごい」ことを示すことが大事である。
例えば、先日、宇宙分野が九州工業大学が世界一ということを知り驚いた。まだまだ知られていないことがある。スタートアップについても日本一起業家にやさしいまちといった既に打ち出している部分もあるため、もっとPRすべき。

- 中学生の将来の夢や目標をもっているに割合に関しても、高校生、大学生はもっと少ないはず。前向きに夢や希望を持てる環境が少ないと考える。具体的に何をするかという指標も大事であるが、そもそも夢を持つためのマインドを持たせるような起業家精神的なところを教育することが大事である。

《三谷 康範 構成員》

- 外から見た視点をもっと上手く打ち出さなければもったいない。九州工業大学では、例えば教員を募集しようとする、外から来てもらうためには、研究・教育環境だけでなく、北九州市の良さなど生活面も含めて見せないといけない。外から見て魅力的か、ということを改めて見直して欲しい。

外国人も然りで、外国人が空港から当大学まで来れるかというと容易には来れない。一旦来てくれたら気に入ってくれるが、来ることを決める最初のバリアは大きい。外部者からの視点が大切である。

《伊藤 直子 構成員》

- 人口増に向けた道筋において、将来推計人口を常に上回るイメージが書かれているが、30ページの、北九州市の人口の現状と将来見通しの図を見ると、これから急降下する可能性がある中で、20年間でどこまで回復できるか、12ページのイメージ図は夢物語ではないか。

北九州市は特に高齢化が進んでいる中で、亡くなられる方が必然的に増える。合計特殊出生率を上げて1.8ではそれを上回れない。そうすると、40年などもっと長く取って将来推計人口を上回るというような目標を立てた方が良いのではないか。

《第7章 7つの個性が輝くまちづくり など》

《津田 純嗣 構成員》

- 「GX」と「カーボンニュートラル」、「デジタル化」と「DX」が入り混じっており、使う場所が間違われている部分もある。一度見直して欲しい。

《壹岐尾 恵美 構成員》

- 最後に各区の特徴について書かれているが、観光という視点が非常に少ない。今を活かすのは観光だと考える。平尾台で特区民泊をしているが、コロナが終わり人が動き始めており、韓国やアメリカからも来ていただいている。

まだまだ観光として北九州は弱いと感じているため、もっと着目すべき。

《松永 守央 構成員》

- 観光分野について、観光資源があるけれど横のつながりが全くない。台湾の観光客に皿倉山から夜景が見たいと言われたが、門司でも同じものが見られることは知らなかったし、実際に

情報も出ていない。市として横の繋がり観光資源を生かす術をプロジェクトチームを立てて、大々的に取り組むべき。

以前、羽田空港に学研都市をアピールするブースを作っていたが、今であれば観光で打ち出すべきではないか。そうしないと北九州市を訪れる人は増えない。

《松本 真理子 構成員》

- 松永守央構成員のご意見に近いが、既にある観光資源だけでなく、新たな観光資源を創出することも大事ではないか。例えば北九州市が掲げるSDGsを意識したラグジュアリーなツアーを創出したり、実際に夢のような体験ができるなど、そういった創出があると良い。

《三谷 康範 構成員》

- 第7章の扱いが一体何だろうと感じた。7つの区の数値データ、ストックやポテンシャルが書かれている形で終わっていて、計画にはなっていない。データを活かして基本計画としてどう考えるのかを記載した方が良いのではないか。このままでは最後にバラバラで終わってしまうように見え、逆効果ではないかと考える。